

読み物資料に基づく道徳授業の考察 (4) 価値「友情」「寛容」に焦点を当てて

川野 哲也

A Consideration of Moral Class Based on Reading Materials (4) : Focusing on the Value, “friendship”, “tolerance”

Tetsuya KAWANO

1. はじめに

道徳の教科化における最大の課題はいじめ問題の克服であった¹⁾。いじめ問題の対応としては、公正や正義、差別の克服、思いやりの観点で加害児童を説得するという指導が必要となる。その一方、いじめの予防としてはクラスの仲間や友達との関係づくりが重要である。教室に居合わせた相手といかにして仲良くなっていくか、いかにして共に学び、支え合う相手になっていくか、いかにして自分と異なる意見や生き方を認め、受け入れていくかという課題である。その部分でうまくいかなければ、クラスの雰囲気は悪くなっていき、見下しや差別が生まれ、いじめに至ると考えられる。深刻ないじめを回避するためにも、友情あるいは寛容といった点での道徳授業が重要であろう。

「友情」の道徳教育に焦点を当てた研究として歌川光一の研究²⁾を挙げることが出来る。歌川は読み物資料を含む教科書記述全体からその特徴を抽出している。読み物資料は、友達の作り方、関係維持の仕方、いじめの対応などについて扱っているが、集団や学級でのトラブル解決についてはあまり扱っていないと歌川はとらえる。また絵本の中における友情に焦点を挙げた磯辺菜々の研究³⁾もある。多くの絵本は、一人よりも友達と一緒にの方がよいというイメージを示す一方、拘束的な圧力を生じさせたり、同質的で排他的な関係を生じさせたりするおそれもあると磯辺は指摘する。いずれの研究も示唆的であり、興味深い考察となっている。

本論はそれらの研究成果に学びつつ、読み物資料を活用した道徳授業のあり方について検討するものである。焦点を当てるのは「友情」と「寛容」である。読み物資料についての解釈、発問のあり方、学習の到達点等について議論したい。

2. 友達論からの示唆

友達とは何か。広辞苑では「親しく交わっている人」と示されている⁴⁾。

友情(友達との感情)については藤野寛の議論が興味深い。藤野は、真の友情という視点は実現不可能な高い理想を掲げてしまうため、そちらには向かわないように議論を展開する。藤野は「友情」を次の四つで定義する⁵⁾。①他者に惹かれること、②相手のために良かれと願うこと、③双方向的であること、④双方ともに気づいていること、である。合ったこともないような相手は含まれない。お互いが相手のことを思い、共に喜び、共に苦しみ、共に楽しい時間を過ごすという関係である。藤野はこの4つを条件とすることで、多くの事例が友情の条件を得ていると考

える。

藤野の観点を具現化しているような絵本もある。これは谷川俊太郎と和田誠による『ともだち』という絵本⁶⁾である。友達とは、学校の帰りに一緒に歩きたくなる相手のこと、父母に言えないことでも言える相手のこと、近くに友達がいない時には、今何をしているのか気になるような、そんな相手のことだと語る。素朴な描き方であるが、非常に示唆的である。また絵本では、趣味が異なっている二人、日本人と外国人、おじいちゃんと子ども、犬と子ども、などがそれぞれ描かれている。言葉が違って、年齢が離れていても、夫婦でさえも、時には友達のように振る舞える。まずは定義の上では「お互いを高め合う」等と高い理想を掲げず、ありふれた日常を含めておきたい。

子どもたちの自然発生的な友達関係はどのような特徴を見出せるであろうか。発達心理学では「仲間関係」として研究が進む⁷⁾。小学生の中学年頃までは、一緒に遊ぶ、同じ行動をする仲間(ギャング・グループ)を形成するが、しだいに言葉で類似性を確かめるような仲間関係(チャム・グループ)に移行する。同質的な友人関係を作る際に「いじめ」が多く発生しており、その関係が指摘されている。子どもたちは、友達からの疎外感や自尊心の不安定さという課題に直面するが、うまく乗り越えられない時に、攻撃的な行動を発露していく。高校生以降になれば、相手の内面や生き方について理解できるようになり、お互いの違いや異質性を受け入れることが出来るようになるという。

小学校から中学校にかけて、子どもたちの友達関係が同質的なグループを形成してしまい、それがいじめなどの多くの問題の原因になっていると指摘する論者は少なくない。例えば小学校教諭の岡崎勝によれば、「いじめ」は、基本的にはみんな一緒にでないがダメという同調圧力からくるという⁸⁾。どんな集団であっても力と力がからみあい、敵対したり排除したりというトラブルはよく起こる。そうした小さな「いじめ」をどのようにやり過ぎかを学ぶことも重要だと岡崎は指摘する。齋藤孝は、いじめ問題の根底には友だち問題があると指摘する⁹⁾。友だちがいなくて不安に感じるため、無理してグループに所属しようとする。その仕組みの中でいじめが起こる。齋藤が提案するのは、自分の趣味や考えを明確に持っておき、嫌な相手とは距離を取り、その距離をコントロールすることである。グループに所属しなければ不安、友だちに認められなければ不安、という状態は辛い。齋藤は友だちごとのそれぞれの距離感があってよいという。

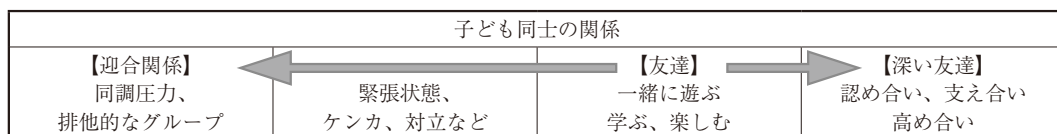
土井隆義もまた、親密な人間関係を問題視する¹⁰⁾。いじめは、他の人間関係への乗り換えが出来ないような、風通しの悪い狭い関係の中で起こるといふ。子どもたちはその範囲の中で対立が起こらないように気を配っている。こうした苦しみから解放されるためには、意外性、異質なものとのお会いが大切だと土井は議論する。菅野仁もまた、子どもたちの同調圧力について取り上げている¹¹⁾。子どもは孤立するのが怖いから、一緒にいるということで安心しようとする。浮いてしまわないように常に無理をして周囲に合わせているという。菅野は「自分というものをすべて受け入れてくれるという友だち」というのは幻想だといふ。過剰な期待をやめて、異質な他者だといふ前提でかかわることを提案している。

友達との良好な関係を維持することは容易ではない。良好な関係のためには、相手の話をよく聞き、自分の気持ちをうまく相手に伝えなければならない¹²⁾。それが出来ずに、安易な方法として同調的なグループに依存してしまっているのではないか。

友達をめぐる関係の難しさに対して、道徳教育はどのような目標を示しているであろうか。道徳教育が掲げる「友情」のあり方は『私たちの道徳』¹³⁾に明記されている。低学年では、友達がいて楽しいという素朴な感情が示されている。中学年では楽しいことに加え、慰めてくれたり、励ましてくれたらといった側面が強調される。高学年および中学校では、学び合い、高め合い、支え合うという側面が強調される。高学年からは、「寛容」の内容が登場し、広い心をもって違

う意見や相手の思いを受け止めること、お互いに認め合って生きることが強調される。

まとめてみよう。友達とは、一緒に遊ぶ、一緒に学ぶ、一緒に楽しむといった広い意味で定義づけておきたい。ただし自分も相手も共に楽しみ続けるということは容易なことではない。それぞれが自分の思いを主張すればケンカや対立になるだろう。傷つきたくない、孤立したくないという思いから表面的な関係、迎合関係を形成していくことも少なくない。一方、道徳教育は、お互いを認め合い、尊重し合い、高め合うという理想的な友達論を提示している。そうした深い関係に到達している者もいるはずである。子ども同士の関係は非常に複雑である。以上のことを整理すると表1のようになる。



(表1)

3. 友達との信頼関係

読み物資料および授業実践から、友達、友情のあり方についてとらえる。まずは児童文学としても有名な小学4年の教材「ないたあかおに」¹⁴⁾である。

山奥にすむ優しい赤鬼は人間と仲良くなりたと思っていた。それを知った青鬼が一つの提案をする。青鬼が村人を襲い、赤鬼が青鬼を退治するというシナリオである。策は成功し、赤鬼は村人と仲良くすることができた。しかし策がばれてしまったのは困ると考えた青鬼は、しばらく村を離れ、旅に出ることにしたという。それを知った赤鬼が涙を流す。

この物語については、一般的には青鬼の思いに共感させて指導する¹⁵⁾。青鬼の心情とは、「赤鬼のために何とかしたい」「赤鬼の気持ちを人間にも分かってほしい」という優しい気持ちである。それが素晴らしい友情であるというとらえ方である。子どもたちが青鬼から優しさや友情を読み取り、そこに深い感動なり共感なりを得れば授業として成功なのである。加藤宜行の実践¹⁶⁾では、赤鬼と青鬼は親友であるかどうかと問う。青鬼は赤鬼に対して心配したり声をかけたりしているが、一方の赤鬼は、自分勝手に青鬼のことを考えてはいなかった。それは不公平である。最後になって青鬼の気持ちが分かり、いざ大切にしようと思った時には青鬼は遠くへ行ってしまっていた。それゆえ赤鬼は泣いた、という解釈である。筆者はこの解釈は重要だと考える。一般的には青鬼が深い友情を抱いていたということになっているが、それは妥当であろうか。一方通行の感情を友情と呼んでよいのだろうか。そもそも赤鬼と青鬼はこれまでどんな関係だったのだろうか。このあたりの批判的な読み方が重要だと思われる。

二人の言動を批判的にとらえさせる星直樹の授業¹⁷⁾もある。結果的に二人は離れ離れになってしまったが、はたしてどうすればよかったのだろうか。授業の中では、赤鬼は断ればよかった、青鬼は旅に出なければよかった、などの議論が展開されている。筆者もまた二人の行動を疑問に思う。村人を前に芝居をうつという策そのものがアドバイスとして間違っているようにも思われる。この読み物資料は、友情モデルとしてではなく、いわば失敗例のように取り上げるべきではないか。

次に取り上げるのは小学4年の教材「絵はがきと切手」¹⁸⁾である。

ひろ子のもとに、遠方に転校していった友達（正子）から絵はがきが届く。しかしそれは定形外郵便だったため、郵便料金が不足していた。不足分を払ったのは、絵はがきを受け取った兄である。ひろ子は返事を書こうとするが、その際にこのことを記すべきかどうかを迷う。母は書かなくていいといい、兄は伝えた方がいいと言う。迷いながらもひろ子は書いて伝えることを決心したのである。

この教材は料金不足のことを正子に伝えるかどうか、その迷いの場面、選択の場面を含む。それゆえ殆どの授業は、二つの考えをそれぞれ明らかにしていくという形で展開する。井原賢一の授業¹⁹⁾でも、伝える理由として、「同じ失敗を繰り返してほしくない」「仲良しだから書いた理由を分かってくれる」等が挙げられ、伝えない理由として、「ケチだと思われそう」「数十円のこと嫌われたくない」等が挙げられる。どちらであっても友達のことを思うという主人公の思いに目を向けさせる。柳沼良太の授業論では子どもたちにゆさぶりをかけている²⁰⁾。ひろ子の立場で考えさせれば、子どもたちは料金不足を伝えないという行動を選ぶ。しかし逆に、正子の立場で考えさせれば、そのことは伝えて欲しいという気持ちになるという。そのゆさぶりの中で子どもたちに判断を求めていく。最後は相手のことを気づかうという思いやりの心に着目させる。

藤元崇彰の授業²¹⁾は興味深い。この授業では、料金不足のことを伝えるという判断を前にして、それは友達レベルが高いことになるだろうかと問いかけている。子どもたちは、ひろ子が正子のことを思い出し「正子なら分かってくれる」と思った、ひろ子は正子と「勉強したり、遊んだり、けんかをしたりとかしてきた」からこそ正子のことは良く分かる、といった発言をしている。これは重要な視点である。ひろ子は悩んだ末、料金不足のことを正子に伝えようと決心した。ひろ子が伝えると決心したということは、すなわち多少のことを言っても傷ついたり亀裂が入ったりしないような強固な関係だったということである。伝えるべきかどうかという判断は、正子とひろこがどのようにかかわってきたかという経験に左右されるのである。

三つ目に取り上げるのは小学6年の教材「ロレンゾの友達」²²⁾である。

男3人がロレンゾからの手紙を読んでいる。男たちは古い友人であった。ロレンゾは20年ぶりに故郷に帰ってくると手紙には書いてある。しかし、ロレンゾが罪を犯し警察に追われているという話を耳にする。男たちは指定の場所でロレンゾを待ちながら考える。自首を勧めるか、逃がしてあげるか、等の意見が出てくる。次の日、警察署でロレンゾに再会する。それは人違いであり、ロレンゾは無実であった。

一般的な授業は、3人はそれぞれどんな思いかを問うていく授業である²³⁾。それぞれの考えを明らかにした後で、その共通点、3人ともロレンゾのことを真剣に考えている、ロレンゾを助けようとしていることが示される。幸阪創平の授業²⁴⁾では、3人のうち、友情を感じるのは誰かと問い、子どもたちに選択をさせている。自首を勧めるのは酷いのではないか、お金を持たせて逃がすというのは自分も共犯になるのではないか、などと意見が出される。久保田高嶺の授業²⁵⁾においては、疑ったり、警察に連れて行こうとしたりするなど、果たして3人は友達と言えるだろうかと問う。

古見豪基の授業²⁶⁾は興味深い。3人のそれぞれの違いを明らかにしながら授業を進めていくが、その中である子どもが次のように発言したという。「ニコライみたいな友だちは、ロレンゾが罪を償った後でも友だちとして優しく迎えてあげられるでしょう」という。自首を勧めようとしたのはニコライである。それは一見冷たいようにも見えるが、より深い部分のニコライの優しさを見出すこともできよう。筆者は次のようにとらえる。3人の考え方が微妙に異なってくるのは、

友情の違いというよりはむしろ、犯罪や秩序についてのとらえ方の違いではないか。3人とも深くロレンゾを心配していたわけであるから、同じように友情を感じていたと言える。むしろ重要なことは、ロレンゾを含む4人が、遊びや勉強、その他生活全般において様々な経験を共有してきた、それゆえ20年経っても気持ちは変わらずに、心配し続けているということ、ではないだろうか。

最後は中学3年の教材「違うんだよ、健司」²⁷⁾である。

僕と耕平は野球部である。僕はなにかと耕平に合わせるが多かった。そこに、積極的ではつきりものを言う健司(転校生)が入部した。しばらくした後、耕平が元気がなくなった。耕平を心配し、声をかけたのは健司だった。三人はG町の盆踊り大会へ行く。健司の祖母宅で食事をする。夜にじっくりと耕平の話を聞く。耕平は自分の祖母が認知症になりかけていることを深く悩んでいたようだった。

一般的な授業では、僕の気持ち、耕平の気持ちを明らかにしていく²⁸⁾。適当に合わせたつきあい方とはどういうものか。生徒は、楽だからいい、嫌われたくない等と共感的にとらえる。耕平がぼつりぼつりと自分の話を始めたのはなぜか。それは僕と健司が、耕平のことを分かろうとしていたためである。お互いに声をかけて行動することが大切だというまともに向かう。一方、問題解決的な授業もある。原木明子の実践²⁹⁾では、あなただったらどのように関わるかと問う。悩みを聞いて一緒に考えたいという意見(健司に近い意見)と、言いたくないなら無理に言わせてはならないという意見(僕に近い意見)が出てくる。「友達だったら相手を心配するのはあたりまえだと思う。だけど本人が何も言わないなら深く聞かないで様子を気にしているほうが耕平にとってもよいと思う」「問い詰めて言わせてしまっても悪いと思う」等という意見も少くない。それを踏まえて友達って何だろうと議論を深めていく。積極的に声をかけるという健司の姿が理想的だというのが、おそらくは一般的な解釈である。しかし原木の授業で示されたように、無理矢理聞かないという意見もまた十分に説得力があるように思われる。

筆者は次のように考える。これは、友情があるから質問した、友情がないから質問しなかったというような単純な話ではない。健司が耕平に対して質問したのは、彼が誰に対しても積極的に関わるという性格だったことにもよる。耕平がここで心を開いたのはなぜであろうか。それはその場の状況や雰囲気によるところが大きいのではないか。盆踊りの様子、その後の食事、星を眺めながら庭で三人並んで話をするというこの雰囲気だからこそ、耕平は素直に自分の話がしやすかったと解釈できる。このような特別な場を設けることが大切だと考えられる。

以上、4つの資料を取り上げた。いずれも、友達との関係においてどのようにするか、迷う場面を含んでいた。友達であるがゆえに迷うところである。おそらく読み物資料の一般的な使い方は、友情があれば問題が解決できるという結論であろう。子どもたちは、友情が大切であり、友情を持つべきだという到達点に向かうよう求められる。

筆者は、授業の方向性を少し変えるべきではないかと考える。一般的な授業においては「友情」をある種の絶対的で普遍的なものとしてとらえている。しかし重要なことは経験のあり方である。一定の共有経験があれば、その分だけ友情は高まっていくであろうが、経験がないところに友情は成立しない。友情は、自他ともに充実して過ごしてきたという経験によって形成される。読み物資料に描かれている様々な場面では、主人公の経験のあり方に着目することを提案したい。経験が深ければ、深い友情によりいかなる困難も乗り越えることができるであろうが(「絵葉書と切手」「ロレンゾの友達」)、もしそれほど経験がないのであれば、そこに深い友情は湧いてこな

いはずである。ただ友情への憧れや迷いのようなものに直面するであろう（「泣いた赤鬼」「違うんだよ、健司」）。経験のあり方に着目することで問題解決の道が開かれると筆者は考える。

4. 寛容、友達づくりについての読み物資料

読み物資料および授業実践から、寛容のあり方についてとらえる。まずは小学3年の教材「たつきゅうは四人まで」³⁰⁾である

小学生の仲良し4人組が集まり、今度スポーツセンターで卓球をしようと話をしていた。そこにとおるが、自分も入れてくれと声をかけてきた。しゅんはそれを、卓球は4人だからという理由で断った。後にしゅんは反省し、とおるに来ていいよと声をかけるが、今度はとおるが断ってくる。後日4人は別の遊びをする際にとおるに声をかけることにした。

この資料は、友情についての資料である。確かにしゅんたち4人の間の友達関係について扱ってはいるが、とおるといういわば疎遠な相手を仲間として迎え入れるかどうかという点では寛容についての視点を含む資料だといえる。

一般的な授業では主人公しゅんの気持ち、その変化について焦点を当てていく³¹⁾。しゅんがとおるを断った際、「仲のいい友達とだけ遊びたいな」「5人になると遊ぶ時間が少なくなる」という気持ちであり、その後とおるを除いて卓球をしていた際、「なんだか楽しくないな」という気持ちになり、その後「悪いことをした。次はいっしょに遊ぼう」という気持ちになる。授業では、友達のことをよく考えて行動すること、誰とでも仲良くしていくことの大切さに気付くように指導している。

筆者は次のように解釈をする。4人ととおるの関係は、同じクラスの子であり、見ず知らずの他人というほどではないが、かといってよく遊ぶような親しい友達ではない。しゅんにとっては、友達ではなかった相手を、友達と同じように接するというに抵抗があったはずである。この問題をどのように解決するべきか。思いやりという気持ちで受け入れなければならないというのは、いささか強引なように思われる。ここで求められる姿勢は、「ひよっとしたら良い関係になるかもしれないし、ならないかもしれない。いったん受け入れてみて、うまくいかなければその次に断ればいい」といった柔軟な姿勢ではないか。

次に取り上げるのは小学校高学年の教材「知らない間の出来事」³²⁾である。

あゆみは9月から新しい小学校へ転校した。教室では、みかが声をかけてくれたが、あゆみは携帯電話を持っていないため、自宅の電話番号を教えた。みかは携帯電話がないことに落胆し、「友達がいないのではないか」という思いを抱き、それを友達に伝える。その話は悪い噂となつて他の子たちにも伝わる。次の日、それに気づいたあゆみは困ってしまい、クラス全体に問題提起をした。みかは悪い噂を流すつもりではなかったと反省し、あゆみに電話をしようと決心する。

こちらも先の資料と同じような構成をしている。これはほぼ初対面に近い相手との関係であり、これを友情とは呼べないはずである。同じクラスでこれから一緒に勉強していく相手であり、これから友達になっていくかもしれない相手である。しかしこの時点では友達とは言えない。その意味でこの教材は、寛容についての教材だと言える。

授業は、みかとあゆみ、それぞれの気持ちを明らかにしながら進む³³⁾。あゆみが携帯電話を持っていないと知った時のみかの気持ちは、「せっかく友達になれそうだったのに、困ったな」というものである。みかがあゆみに電話した時には「ごめんね。あゆみさんと友達になりたい」等と

話したと推察できる。授業では、友達がいること、友達と仲直りをして友達の大切さに気付いたという話を取り上げていく。

筆者は次のように解釈をする。この話は転入生とのかかわり方であって、まだ友達にもならないような状況の話である。この段階でトラブルになってしまったのはなぜか。友達になりたい、友達になれそうだという過度な期待によるところが大きい。このような場面ではどのように接するべきだろうか。あまり大きな期待をかけないように、相手のありのままの姿を理解していくことが必要である。ほぼ初対面ということは、いわば心の距離は非常に遠いはずである。お互いが理解していくには十分な時間が必要である。その自覚が、相手の存在を受け入れる余地を生むのである。

次は寛容についての小学6年の教材「ブランコ乗りとピエロ」³⁴⁾である。

サーカス団の話。ピエロは古くからのスターであり、リーダー格であった。一方のサムは新入りで実力派。サムはスター気取りでピエロの指示には従わなかった。この日もサムは一人で時間いっぱい演技をしてしまう。ピエロは、当初は怒りでいっぱいだったが、サムの真剣な姿を見ているうちに怒りが消えていく。ピエロは自分にも目立ちたいという気持ちがあったことを告白し、サムを認め受け入れていく。その後はサムとピエロが力を合わせた演技をするようになる。

授業では、ピエロの気持ち、ピエロがサムを許したのはなぜかという点に焦点を当てていく³⁵⁾。そこで議論されているのは、「観客のために頑張るサムの強い意志に気付いた」「サムに、自分だけがスターではないということに気付いてもらいたかった」という点である。さらにピエロはサムの寛容な姿から自分も身勝手だったと認めていく。つまり、ピエロが寛容になったから、サムもまた寛容になった、という解釈である。加藤宜行の授業は興味深い³⁶⁾。ピエロがサムの演技を見てどんな変化があったのか。演技自体はそれまでも見ていたはずであるから、今回の演技で今までとは違う何かを発見したはずである。ピエロはサムの様子を見的过程中で自分の心の中と同じものを見出した。それで心を開いた、という解釈である。

この教材は解釈が困難である。サーカス団に与えられた時間を殆ど使って一人の演技をしてしまうというそのサムの姿は問題であるし、ピエロがそこに腹を立てるのは当然のことである。その問題はどうなったのだろうか。ピエロの中から憎しみが消えていくという理由は、いまちははっきりとしない。以下は筆者の解釈である。ピエロが抱いていたサムへの怒りとはどういうものか。それはサムが他のメンバーを退けようとしていた、自分中心のサーカス団だと考えていたことに向けられている。つまりピエロは被害者意識を抱いていたのである。しかしサムの演技を見てるとそんな野心はなく、純粹に最高の演技を目指そうという思いだったと気付く。どちらがサーカス団の主導権を握るかという視野では対立するばかりであるが、相手にその意図はないということが分かると、受け入れやすくなる。寛容な心というのはそのようにして形成されるのではないか。

最後は中学1年の資料「言葉の向こうに」³⁷⁾である。

主人公の加奈子は、海外サッカーチームのファンである。試合の結果をインターネットで確認し、ファンサイトにコメントを寄せる。ところがある日、応援コメントの中に、A選手に対する悪口コメントを見つける。加奈子は反論する文章を書き込む。しばらくすると悪口コメントとそれに反論する自分のコメントとの両方を批判するコメント（中傷する人たちと同じレベルで争わないで）が挙げられる。女の子は、コメントの難しさを感じる。

増田千晴の授業³⁸⁾では、加奈子が悪口コメントに反論の書き込みをしたという点に焦点を当て、自分が加奈子の立場だったら同じように反論するかと問う。反論しない、面倒だから適当に答えておく、などの答えが出される。その後、様々な意見を挙げていく。「たくさんの人が見ているサイトだから互いに不愉快になるような言葉は書いてはいけない」「知らない人だから何を言ってもいいというものではない」「知らない人でも相手のことを考えてSNSで発信していかなくてはいけない」「一つの意見を発信するとそれをいいと思う人と悪いと思う人がいることを考えておく」などの意見を挙げていく。野島円の授業³⁹⁾でも、「自己中心的ではいけなくて、相手のことを考えることが大切」「違う人の意見も、相手からすると自分の意見も違う意見なのだから、それに腹を立てたり、相手を避けようとしたりするのはなく、互いになぜ違うのかを考えながら意見交換をすることが必要」等の意見が出てくる。

筆者は次のように考える。確かにインターネット上の相手、見たこともない相手に対しても、節度やある程度の敬意を含めて言葉を選ぶことは重要である。しかしこの資料の最大の議論は、心無い悪口に対してどのように接するかである。聞き流したり、無視したりすることが必要となってくるが、はたしてそれは「思いやり」か。顔を向き合わせる現実のコミュニケーションと同じような姿勢を、インターネットにも向けるべきであろうか。筆者は違うと考える。インターネットというバーチャルな空間には多様な人が関係している。誰が見ているか分からないのであるから、匿名で、むしろ軽い気持ちで参加するくらいの態度が必要である。逆にそのように参加してきた相手に対して熱い思いを向けることの方が間違いないのではないか。多様な人がかかわるその空間に、親密な関係を求めるがゆえに、憤慨したり反論したりしてしまうと思われる。上記の生徒の感想のうちいくつかはこのことに触れようとしている。

以上、4つの資料を取り上げた。いずれも身近な相手、友達、あるいは今後友達になれそうな相手との衝突の場面である。目の前にいるその相手の考えや思いを受け入れることができずに対立・排除しようとする。おそらく読み物資料の一般的な使い方は、寛容の心があれば問題が解決できるという結論であろう。子どもたちは、相手を思いやること、相手を広い心で受け入れることが大切だという到達点に向かうよう求められる。

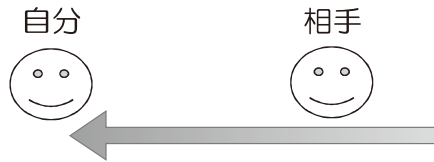
筆者は、授業の方向性を少し変えるべきではないかと考える。一般的な授業においては「寛容」を心の問題としてとらえるが、寛容とは、その相手との距離感によって可能になるのではないかと。相手の姿に深く共感できないけれども、かといって否定したり排除したりすることなく、一定の距離感でかかわり続けるということこそが、「寛容」の意味ではないだろうか。読み物資料に描かれている様々な場面では、主人公と相手とを含む距離感に目を向けることを提案したい。主人公が怒ったり憤慨したりするのは、自分たちの安心かつ安定した関係性を守ろうとしているから（「たつきゅうは四人まで」「ブランコ乗りとピエロ」）であり、あるいは、自分が深く共感できそうだと過度な期待をかけているから（「知らない間の出来事」「言葉の向こうに」）である。一歩でも二歩でも下がって、広くゆったりとした距離感の中で相手をとらえることにより問題は解決できると筆者は考える。

5. 考察

多くの読み物資料を取り上げてきた。資料そのものは現実的な場面を示しており、優れた教材だと言える。しかし一般的な授業の焦点の当て方にはいくつかの問題があるように思われた。筆者の立場から授業改善の視点について考察してみたい。

一般的な授業のあり方は、子どもたちに「友情が大切だ」「相手を思いやることが大切だ」「受け入れることが大切だ」といった言葉を言わせようとする。「友情」とは、目の前の友達を信じ

ることであり、友達を思いやることであり、また「寛容」とは、相手を理解し、受け入れることである。それゆえ距離を取ったり、知らぬ顔をしたり、話をしなかったり、その場を離れたたり、といったことは全て、友達を大切にしない行為、寛容に欠ける行為だということになる。ここでは自分と相手との関係が、直線的な関係として扱われている。相手との関係は近い方がよい、相手との距離を近づけるような実践意欲が重要だ、という考え方が導かれる。以上のことを図1のように表記することができる。



(図1)

このモデルは一つの理想を示してはいるが、それと同時に、いささか現実離れした見方であるようにも思われる。最も重要な点は、自分と相手とが楽しい時間を共有したかどうか、豊かな経験を重ねたかどうかにある。しかしながら一般的な授業では、経験の有無は殆ど議論されない。どのような経験があったかに関係なく、「相手を大切にせよ」「思いやりを向けよ」という極端な理想を子どもたちに課してしまう。それは、本音を隠して相手に迎合するような子どもたちにとっては、有効な視点とはならないであろう。本来子どもたちに示すべきことは、いかなる時、いかなる相手でも友情や寛容の心で接するべきだということではなく、相手との距離感に応じて、無理することなく自分なりのかかわり方を模索することである。(むしろ自分なりのかかわりを追求することによって、支え合い、高め合うような良好な関係がひらかれるのではないか。)

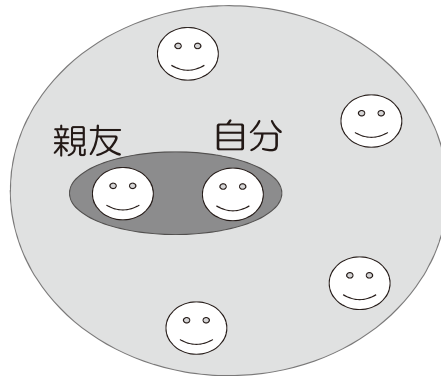
筆者は、読み物資料の新しい読み方を提示してきた。それは、読み物資料の登場人物が、どのような共有経験を経ているかという点に着目しながら議論するということである。主人公が深い友情を抱いていたとするならば、そこには豊かな共有経験があるはずである。友情のように見えて本当のところ友情でないのかもしれない。楽しい経験がないにもかかわらず無理して感情を持つべきではない。「どうすべきか」という判断は、その相手との経験によって決まることであって、たんに友達だからという理由で判断するべきではない。

では、共有経験の少ない相手は、友達ではないのだから無意味かという決してそうではない。それは「親友」ではないが、「浅い友達」である。浅い友達という位置は非常に重要である。自分の趣味、感覚、考え方とは異なっているが、場合によっては共に楽しい時間を過ごすことも可能である。勿論、自分が納得できない場合、嫌な思いをした場合にはただちに離れることも出来る。必要以上に相手に合わせる必要はないが、かといって相手を否定する必要もなく、一定の範囲でかかわり続けるという距離感である。「寛容」という態度は、この距離感でこそ成立するのである。道徳授業で「寛容」に焦点を当てる場合は、自分と相手との適度な距離感に着目しながら議論するべきだと考える。

さて「友達を大切にする」とはどういうことか。それは「親友」か「浅い友達」かによって変わってくる(あるいはそこには段階のようなものがあって、3つ、4つとレベルを分けても良いかもしれない)。敢えて示せば、直線的な関係ではなく、複数の空間的な関係だと言える(図2)。

「親友」(図では濃色の箇所)を大切にするということはどういうことか。いざトラブルに巻き込まれたり、疎遠になったりして相手を疑うようなことがあっても、それまで共有してきた経験を想起して相手を信頼することであろう。親友以外にも様々な形で友達と呼べる存在がいる。いつも一緒にいるわけではないが、しかしながら場合によっては一緒に遊ぶことが出来るという状

態の相手「浅い友達」(図では薄色の個所)である。この「浅い友達」を大切にするということはどういうことか。それは、自分と相手が同じ感覚や考えにはならないという前提で、それでも楽しく過ごせるということである。具体的には、授業でグループ活動をしたり、クラブで一緒になったりした際に適度にかかわるということである。この距離感において新しい出会いや多様な文化の受け入れが可能になってくる。こうしたかかわり方こそが「寛容」の態度だと言えよう。



(図2)

本論では「友情」「寛容」に焦点を当てて議論してきた。「友情」「寛容」という道徳的価値のあり方は、非常に複雑な形をしていると言える。今後も、他の道徳的価値について検討を重ねていきたい。

<注及び参考文献>

- 1) 川野哲也「道徳教育の現代的制度改革に関する考察」『山口学芸研究』第7号、2016年、pp.1-5。なお教科化以降の2016年11月18日には文部科学大臣のメッセージ「いじめに正面から向き合う『考え、議論する道徳』への転換に向けて」が示されている。
- 2) 歌川光一「小・中学校道徳教科書にみる友達との関係づくりの諸相」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』第4号、2018年、pp.37-42。
- 3) 磯辺菜々「絵本に描かれる『友情』イメージと友情至上主義の社会学的分析」『教育・社会・文化：研究紀要』17号、2017年、京都大学大学院教育学研究科教育社会学講座、pp.15-35。
- 4) 新村出編『広辞苑 第7版』岩波書店、2018年。
- 5) 藤野寛著『友情の哲学 緩いつながりの思想』作品社、2018年、第1章。
- 6) 谷川俊太郎作、和田誠絵、『ともだち』玉川大学出版部、2002年。
- 7) 中澤潤編著『発達心理学の最先端』あいり出版、2009年（荒木史代による7章、榎本淳子による9章）、渡辺弥生著『子どもの「10歳の壁」とは何か?』光文社新書、2011年などを参照した。
- 8) 岡崎勝著『学校再発見』岩波書店、2006年、pp.56-65。
- 9) 齋藤孝著『友だちがいなくて不安だ症候群につける薬』朝日新聞社、2005年。
- 10) 土井隆義著『友だち地獄』ちくま新書、2008年。
- 11) 菅野仁著『友だち幻想』ちくまプリマー新書、2008年、特に3章。
- 12) 友達づくりの方法を示す子ども向けの本もある。『学校では教えてくれない大切なこと2 友だち関係』旺文社、2015年。
- 13) 『わたしたちの道徳 小学校一・二年』『わたしたちの道徳 小学校三・四年』『わたしたちの道徳 小学校五・六年』『私たちの道徳 中学校』いずれも文部科学省。
- 14) 「泣いた赤おに」『どうとく4 きみがいちばんひかるとき』光村図書、道徳教科書。
- 15) 赤堀美喜夫「ないた赤おに」赤堀博行編著『考え、議論する道徳科授業の新展開 中学年』東洋館出版社、2018年、pp.60-63。
- 16) 加藤宜行・青木伸生著『道徳授業が深まる国語教材活用の実践』学事出版、2014年、pp.51-58。
- 17) 星直樹「ないた赤おに」柳沼良太ほか編著『定番教材 問題解決的な道徳授業』図書文化社、2017年、

- pp.70-77。
- 18) 「絵はがきと切手」『小学道徳 生きる力 4』日本文教出版、道徳教科書。
 - 19) 井原賢一「絵葉書と切手」赤堀博行編著『考え、議論する道徳科授業の新展開 中学年』東洋館出版社、2018年、pp.142-145。
 - 20) 柳沼良太著『問題解決的な学習で創る道徳授業 超入門』明治図書、2016年、pp.59-64。
 - 21) 藤元崇彰「絵はがきと切手」坂本哲彦編著『道徳科授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社、2019年、pp.104-107。
 - 22) 「ロレンゾの友達」『きみがいちばんひかるとき 小6』光村図書、道徳教科書。
 - 23) 保延秀紀「ロレンゾの友達」赤堀博行編著『考え、議論する道徳科授業の新展開 高学年』東洋館出版社、2018年、pp.154-157。
 - 24) 幸阪創平「ロレンゾの友だち」柳沼良太ほか編著『定番教材でできる問題解決的な道徳授業』図書文化社、2017年、pp.122-129。
 - 25) 久保田高嶺「ロレンゾの友達」坂本哲彦編著『道徳科授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社、2019年、pp.148-151。
 - 26) 古見豪基「ロレンゾの友だち」加藤宜行、岡田千穂編著『一期一会の道徳授業』東洋館出版、2016年、pp.96-99。
 - 27) 「違うんだよ、健司」『中学道徳 あすを生きる 3』日本文教出版、道徳教科書。文部科学省『中学校道徳 読み物資料集』平成24年(2012年)。
 - 28) 重野典子「違うんだよ、健司」柴原弘志編著『中学校3年生の道徳授業 35時間のすべて』明治図書、2019年、pp.68-71。
 - 29) 原木明子「信頼し合い励まし合って友情を深めていこう」柳沼良太ほか編著『生徒が本気になる問題解決的な道徳授業 中学校』図書文化、2018年、pp.122-131。
 - 30) 「たつきゅうは四人まで」『小学どうとく 生きる力 3』日本文教出版、道徳教科書。文部科学省『小学校道徳 読み物資料集』平成23年(2011年)。
 - 31) 岸本貴之「友達のことを互いによく理解し、友達を大切にしようとする児童を育てる」赤堀博行編著『道徳授業の定石事典 中学年』明治図書、2012年、pp.75-82。
 - 32) 「知らない間の出来事」文部科学省『私たちの道徳 小学校五・六年』。文部科学省『小学校道徳 読み物資料集』平成23年(2011年)。
 - 33) 石井頌子「信頼し合い、友達を大切にしようとする児童を育てる」赤堀博行編著『道徳授業の定石事典 高学年』明治図書、2012年、pp.82-89。なお他にも同様の視点での授業がある。阿部利幸「知らない間のできごと」赤堀博行編著『考え、議論する道徳科授業の新展開 高学年』東洋館出版社、2018年、pp.64-67。
 - 34) 「ブランコ乗りとピエロ」『小学道徳 生きる力 6』日本文教出版、道徳教科書。文部科学省『私たちの道徳 小学校五・六年』。
 - 35) 中塩絵美「ブランコ乗りとピエロ」『考え、議論する道徳科授業の新展開 高学年』東洋館出版社、2018年、pp.158-161。なお廣末唯は、ピエロとサムの心の距離が縮まっていくというとらえ方をしており興味深い。廣末唯「ブランコ乗りとピエロ」坂本哲彦編著『道徳科授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社、2019年、p.156-159。
 - 36) 加藤宜行「ブランコ乗りとピエロ」加藤宜行、岡田千穂編著『一期一会の道徳授業』東洋館出版、2016年、pp.100-103。
 - 37) 「言葉の向こうに」『私たちの道徳 中学校』文部科学省。文部科学省『中学校道徳 読み物資料集』平成24年(2012年)。
 - 38) 増田千晴「言葉の向こうに」柴原弘志編著『中学校3年生の道徳授業 35時間のすべて』明治図書、2019年、pp.80-83。
 - 39) 野島円「認め合い学び合う心」柳沼良太ほか編著『生徒が本気になる問題解決的な道徳授業 中学校』図書文化、2018年、pp.144-149。

